

優秀賞の「蝶を殺せないダメな僕」は十章に分かれていて、一章のタイトルは「障害」です。「僕は重度の障害を持ち、学校ではいじめられていて、両親からもほったらかしにされている」という記述から物語は始まるので、主人公は人間の男の子だと、読者の多くは思うのではないのでしょうか。しかし一章の最後で、「僕」の正体は「死神」であり、「障害」とは「慈悲の心を持っていること」だと明かされます。その仕掛けが、まずうまいなと思いました。

続けて二章「センパイ」から終章「僕の鎌」まで、一気に読ませる筆力にも感心しましたし、なによりいいのは、登場人物たちが魅力的なことです。

「僕」がかっこいいと憧れる、魂の収集の仕方がクールな死神の「センパイ」。

「僕」が恋してしまう、入院中の、明るく優しい人間の「女の子」。

「僕」と「センパイ」、「僕」と「女の子」のやりとりから、センパイの、そして女の子のキャラクターがよく伝わってきます。また、「死神なのに慈悲なんか持ちちゃって」という「僕」の葛藤や、女の子へのひたむきな恋心が、素直に描かれているところもいいと思いました。

ストーリー展開は、ややありきたりかとも感じましたが、登場人物三人の思いが物語のなかでしっかり機能していて、ひとつひとつの場面が印象的であり、最後、書き過ぎずに、すっと止める終わらせ方も綺麗。タイトルも含め、センスのいい作品でした。

奨励賞の「長いトンネル」は、朝の電車が舞台背景の話です。

「私」は、同じ車両に乗る人たちの顔をほぼ覚えています。いつも割り込みをして席に座るおばさん。姿勢よく立って本を読んでいる小学生の男の子。やがて電車はトンネルに入り、そこであることが起こります。

突然の出来事でパニックになった車内。その様子がよく表現されていると思いました。特に、ブレーキ音、叫び声など、聴覚での描出の仕方が上手です。

さて暗闇の中で乗客たちがとった行動とは……。それによって発見されたものとは……。意外な人が見せた優しさとは……。そして、じつは「私」が抱えていた過去とは……。

さまざまなことに光が灯り、人間の「善」を信じることができる、あたたかな作品でした。書き方の粗さや設定の甘さなど、気になるところもありますが、さらりとまとめたラストがさわやかで、読後感がとてもよい短編でした。

佳作の「想い残し(ゼロ)本舗」。中心人物は、死んでしまった十七歳の青年。想い残しを解消するためにこの世に戻ってきます。死者が思いをとげるためこの世に戻るという設定の文学作品はこれまでもありますが、「戻った世界で事故に遭い、記憶喪失になる」というところがユニークでした。

今回も、力のこもった幾つもの作品に出会えたことを、たいへん嬉しく思います。

物語を描くことに真摯に向き合う皆さんの姿勢に、心を打たれました。